

いまやペットは、人間同士の家族より固いきずなで結ばれたパートナーである。生前契約における仕事の主要なテーマにもなっている。

「私の死後、愛犬のハナは安楽死させて」「持参金1000万円をつけるので、私のインコを引き取ってほしい」「老犬が4頭いるが、私より先に逝くたろ

人生 締めくくろう

自分らしい最期

松島 知成



うか」「うちのネコはネコ好きな人にもらってほしい」——などさまざま。それぞれにその人なりの思いや考え方が反映されているが、問題もある。

例えば、犬好き、ネコ好きの人に飼ってほしい、と思っても、ペットも年を重ねると、新しい主人にはなかなかつきにくい。また、自分より先にペットが死ぬと思ってもそうならない場

合もある。ペットが先に死ぬと思っている人に、そうならなかったときの決断を求めるとも酷である。老犬の場合、現実的には安楽死を選ぶざるを得ないことが多い。

小鳥に大金の持参金をつけたい、という場合も、世話を引き受けてお金だけもらい、小鳥は死なせてしまおうということが起きな

いとと限らない。リスクが大きすぎるので、私たちも対応に困り果てた。結果的には、幸か不幸か、悩んでいるうちに、小鳥が先に死んでしまったのだが、その方は、一人ぼっちの寂しさに耐え兼ねて、もう一度ペットを求めようかどうか、と悩んでおられる。

私たちが「家族の役割を引き受けず」と大見えを

ペットの行く末

切ってみても、日々の生活での心の癒やしまでは難しい。また逆に、あるじを失ったペットの悲しみに接することもあり、痛々しく見るに忍びない。保健所に連れて行き、安楽死に手を貸すのはもったつらい。今後、「ペットの家族化」はますます進むだろうが、この問題で明確な答えを出すことは至難の業である。

「ペットのいない寂しさに、今の私に言えることは、

耐えるか、ペットを自分の分身と考え、自分の死と同時に、ペットにも死を迫る決断をしておく」ということだ。

新しい飼い主を探して、新しい飼いや愛護の団体もあるが、ペットの側にも心がある。生前契約を結んだ人たちとペットの結びつきを固く目途をたてる。飼い主、ペット、ど



伴りよを失ったペットの悲しみを、新しい飼い主は癒やせるだろうか—近藤卓貴写真

ちらが先に逝っても、残された者のつらさを、他の誰かが代わって癒やすことは難しいとはしばしば感じる。新しい飼い主を見つけてさえすれば解決になるのか、私には疑問である。

(NPO法人代表)

老いしたく読本

毎週木曜日に掲載